

# 知的好奇心を高め、共に探究し続ける力を育む幼児教育についての実践研究 — 幼児の心がときめく瞬間（とき）に寄り添って —

藤井 佐由美  
岐阜市立岐阜東幼稚園

福地 淳宏  
岐阜聖徳学園大学教育学部

## A Practical Research on Early Childhood Education which Develops a Child's Intellectual Curiosity and Propensity to Inquire: Encouraging Curiosity in Children

Sayumi FUJII, Atsuhiko FUKUCHI

キーワード：思考力の芽生え 知的好奇心 探究心 環境構成 教師の指導・援助

### I. 研究実践の背景と目的

今回の学習指導要領等の改訂において、幼児児童生徒が「持続可能な社会の創り手」となるよう教育課程を編成・工夫することが求められている<sup>1)</sup>。そのために、幼稚園をはじめすべての校種を通じて「主体的・対話的で深い学び」の実現が期待され、とりわけ予想困難で正解のない課題に対しても、試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして探究し続けていく力の育成が重視されている。また、そういった力を育成するために、発達の段階に応じた学びの充実と各学校段階間の円滑な接続がこれまで以上に期待されており、幼稚園教育要領においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目にわたり示された。これらは、遊びを通して一体的に育まれていくものであるが、その中でも「(6) 思考力の芽生え」は、周囲の環境に好奇心をもって積極的に関りながら、新たな発見をしたり、もっと面白くなる方法を考えたりする中で育まれていくものであり、小学校生活で出会う新しい環境や教科等の学習に興味や関心をもって主体的に関わることにつながる。また探究心をもって考えたり試したりする経験は、主体的に問題を解決する態度へとつながっていくものである<sup>2)</sup>。今後ますます重要になってくる「試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして探究し続けていく力」の育成は、小学校入学以降に期待されるのではなく、まさに目を輝かせ、心をときめかせながら遊び込む幼児期における芽生えにこそ、その始まりがあると考えらる。

今回実践を行った岐阜市立岐阜東幼稚園（以下、本園と省略）は、岐阜市の東部に位置し、3～5歳児をそれぞれ1学級ずつ受け入れ、「やさしい心でなかよく力いっぱい遊ぶ子」を教育目標に日々の教育に当たっている。これまでの「とことん遊び込む教育」を実践する中で、教師の指導の下、元気で明るく、一人一人が自発的な遊びに取り組むという育ちの成果はみられるものの、「幼児の心の動きに気付いても、そこから広げたり深めたりしにくい」、「教師自身の興味や関心の幅が狭く、遊びがパターン化しやすい」、「遊びの中で幼児がどんな学びを深めているのかを読み取りにくい」など教師側の課題が浮き彫りとなっていた。

### II. 実践研究の方法

#### 1. 研究の重点

上記の実態を踏まえ、本園の「遊んで、遊んで、とことん遊び込む教育」の中で、幼児からの主体的な発信を大切にした特色ある活動内容を創り出すとともに、年間を通した活動についてカリキュラムマネジメントを行うことで、全ての教師が、幼児の探究に向かう主体性と教師の意図性を絡み合わせながら、遊びを双方に創り出す指導の展開が具現されることを願い、以下の2点を実践の重点として研究を進めた。

- (1) 知的好奇心が高まり、探究心が深まる過程のイメージ化とそれに基づく指導計画の工夫
- (2) 幼児の興味や関心に寄り添い、主体的・探究的な学びを生み出す環境構成や教師の援助の工夫

その中でも、幼児が見せる心の動きの見取りとそれに応じた効果的な教師の指導・援助の充実について、特に重視して実践に当たった。

## 2. 実践推進と検証の方法

幼児の主体性に基づき、意図的・計画的な指導の中で幼児の学びと成長を丁寧に見取り、知的好奇心や探究心がどう高まっていったかについて、「シャボン玉作りへの挑戦」、「光と遊ぼう」という2つの大きなプロジェクトを展開し、具体的なエピソードの吟味検討を重視する。

その成果と課題については、両プロジェクトを通して幼児が成長した姿の事実、教師の手ごたえや保護者の変容などを基に検証を行う。

## Ⅲ. 実践内容の詳細

### 1. 知的好奇心が高まり、探究心が深まる過程のイメージ化とそれに基づく指導計画の工夫

教師は、幼児の心がときめく瞬間（とき）を見逃さずつぶさに読み解き、その思いや願いに寄り添い、遊びにおける幼児の心の動きの予想に基づき、それが発展していくように目的達成的な題材や環境構成を工夫することが重要であると考えた。また、それらを仲間同士の心の動きとつなげながらさらに発展するように援助する中で、幼児がとことん遊び込む経験を積み重ねていくことにより、幼児一人一人の知的好奇心を高め、仲間と共に探究し続ける力を育みたいと考えた。

そのために、まず知的好奇心の高まりと探究心の深まりを次のようにイメージ化するとともに、指導を構想する際の基本とし、年間の指導計画の工夫に生かした。

#### (1) 知的好奇心の高め、探究心が深まる過程のイメージ図の作成

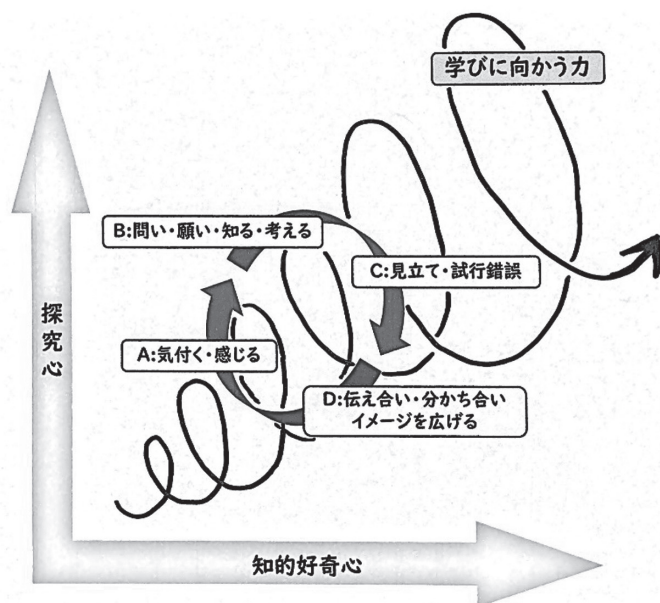


図1 「知的好奇心の高まりと探究心の深まり」のイメージ

幼児は、「もの」や「こと」と出会い、以下の4段階を経て、成長していくと仮定した。

- A：気付く、感じる段階
- B：問いや願いをもち、知ろうとしたり、考えたりする段階
- C：見立て、思いをめぐらせ、試行錯誤する段階
- D：伝え合い、分かち合う中でイメージを広げる段階

幼児は、この4段階を「人」との関わり合いの中で、具体的に体験することにより、知的好奇心や探究心を高め、さらに新しい次の4段階へとつながっていく。この繰り返しの営みにより、達成感や充足感を味わい、知的好奇心を高め、仲間と共に探究し続ける力が育まれると考えた。

#### (2) 幼児の学びが発展していく指導計画の工夫

6月から7月にかけて「シャボン玉作りへの挑戦」、10月から2月にかけて「光と遊ぼう」という2つのプロジェクトを設定した。まず、「シャボン玉作りへの挑戦」において、幼児一人一人が自らの興味や関心を発展させ、主体的に学び続ける姿を具現する。その上でさらに、「光と遊ぼう」において、学級の仲間や異年齢の幼児との関わりを主体的に深めながら、協働的・探究的な学びへ発展していくことを意図した。これらの基盤として、教師は常に、遊びにおける幼児の心の動きに寄り添い、丁寧な予

想に基づき、それが発展しながら目的達成的な学びが展開できるよう指導計画を工夫・作成した。以下にその概要を示す。

表1 プロジェクトにおける指導計画の概要

	シャボン玉作りへの挑戦（6月～7月）	光と遊ぼう（10月～2月）
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちの興味や関心をさらに探究しようとする姿が深まってきている。一方で、活動に参加しにくい幼児もいる。</li> <li>身近な素材や自然の変化に気付き、遊びに生かしたり、いろいろな使い方を試したりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な体験を通して興味や関心が深まり、感じたことや考えたことを様々な形で表現しようとする。</li> <li>学級全体でやってみようとするのを投げかけると、それぞれに考え意見を言うなど積極的に行動する。</li> <li>異年齢の幼児に優しく接し、慕われていることを喜び、年長児らしい姿が多く見られる。</li> </ul>
◎主な過程	<p>◎いろいろな友達と一緒に自分たちで考えながら遊びを進める楽しさを味わう。</p> <p>◎思いや考えを出し合い、教師と共に遊びを創り出す喜びを味わう。</p>	<p>◎季節の変化を感じながら発見したことを進んで伝えたり、それらを遊びに取り入れれたりする。</p> <p>◎共通の目的に向かって思いや考えを出し合い、力を合わせて取り組み達成感を味わう。</p> <p>◎仲間と一緒に場を作ったり、同じものを身に付けたりして自分たちで創り出す遊びを工夫して行う楽しさを味わう。</p>
留意点	<ul style="list-style-type: none"> <li>幼児の自発的な思いや願いを丁寧に読み解き、活動に取り入れる。</li> <li>経験や知識などから、幼児なりの理由を考える機会を保障する。</li> <li>自ら遊びや活動に取り組めるよう、興味や関心に応じて環境を構成し、一人一人の遊びや興味の変化を把握して環境を再構成する。</li> <li>遊びの継続を支えるために、何を残して何を片付けるか、何を提供し提案するのかなど、幼児と相談したり、教師間で討議したりしながら必要に応じて整える。</li> <li>遊びが生まれる仲間との関わりを丁寧に見守り、教師も仲間の一員となって対話的に関わる。</li> <li>自分たちで遊びを進めていく過程を大切に、その中で互いを認め合い、それぞれの力を発揮している様子を認めていく。</li> </ul>	

2. 知的好奇心の高まりと探究心の深まりを生み出すプロジェクトの展開

(1) プロジェクト1 年長児「シャボン玉作りへの挑戦」【2021年6月～7月】

プロジェクト1におけるエピソードの概要と教師が特に工夫した環境構成と教師の援助

①エピソードの概要と具体的な幼児の姿	②主体的・探究的な学びが生まれる活動時の環境構成(●)と教師の援助(○)の工夫
<p>石鹼液（固形石鹼を削り水と混合したもの）にストローを差し、息を吹き込むことで、ハチの巣状に泡が盛り上がる様子に気付き、心がときめいたA児が、「泡を遠くまで飛ばしたい」という願いをもつようになったことをきっかけに、シャボン玉作りへと発展していった実践</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●幼児の興味や関心に寄り添い、素材や資材、道具を配置・準備した。</li> <li>○幼児が自分なりに考え試しながら友達の考えにふれることができるための時間の保障と見守りを行った。</li> </ul>
<p>幼児たちは、「どうしたらうまくシャボン玉ができるのか」を、幼児なりに見立て、考え、素材を見付け出していった。幼児たちは、風呂で体を洗っていた時に、シャボン玉ができたというB児の経験談を基に、「ボディークリーム」、「シャンプー」、「リンス」、「洗濯用洗剤」、「食器用洗剤」など、『泡立つもの』を共通点に考え出した。それらの材料の全てを試したことで、「シャンプー」が一番できやすいことが分かった。結果から、「トロトロ」、「ベタベタ」するものができやすいと考えた幼児た</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●幼児たちが、「泡立つ」から連想される共通点を基に、シャボン玉ができそうな素材を考えたことを受けて、教師は、翌日、幼児が考えた素材の全てと、軽量カップ、複数で取り組みやすいタライなどを準備しておいた。</li> <li>●結果を掲示しておくことで整理され、それをもとに原因や理由を考え、新しい予想を立てやすいと考え、それぞれの液によるシャボン玉のでき方を比較できるように、幼児が紙に書いたものを、戸外の活動の場に掲示</li> </ul>



図2 様々な素材を試す

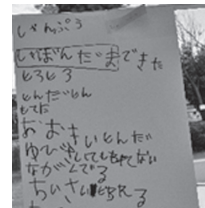


図3 結果の掲示

ちは、さらに他の素材を考えるようになった。遊びの楽しさから家庭でも相談する幼児が現れ、なんと



図4 納豆の登場

C児が「ひきわり納豆」を持ってきた。「ネバネバしているから、きっとシャボン玉ができるはず。」と考えたようだった。教師の予想を超え、納豆入りのシャンプー液は、見事にシャボン玉ができた。それが刺激となり、幼児たちの好奇心は膨らみ、「水のり」、「めかぶ」などに加えて、日を重ねるごとに、家庭内で保護者からの情報収集から、甘いものが必要ではないかと考え、「ゼリー」、「チューペット」、「ジャム」なども、次々と家庭から持ってきては、探究を繰り返した。幼児たちが考えた材料は、「りんごジュースやはちみつ、もずく、オクラ、タコ、油やイカ、なめくじ、かたつむり、泥水、雨水、汗・・・」など様々であった。中でも「もずく」では、いつまでも割れにくいシャボン玉ができた。

繰り返される探究活動の中で、「よくできたものを混ぜ合わせてみよう」というD児の意見が出て、「シャンプー+ブルーベリージャム+はちみつ+水」の混合液で試してみると、何度もシャボン玉ができ、今までで一番大きい直径20cmほどのものができた。

さらに、教師が次へのきっかけ作りとしてシャボン玉動画を見せたことにより、幼児たちは「もっと、大きくて長くて割れないシャボン玉を作りたい」という願いをもつようになった。そこで、ハンガーに毛糸を巻いた輪を作成し、再び試みたが、動画のようにはうまくいかなかった。幼児たちは相談し、E児の提案で岐阜市科学館の職員に聞いてみること



図6 科学館とのオンライン

は、せんたくのり+グラニュー糖+水がよいこと、「今まで液を混ぜ過ぎて泡泡にしてしまっていた

C児が「ひきわり納豆」を持ってきた。「ネバネバしているから、きっとシャボン玉ができるはず。」と考えたようだった。

教師の予想を超え、納豆入りのシャンプー



図5 材料を混合する

になった。

岐阜市科学館とはオンラインでつながり、専門家から最高のシャボン玉液の作り方を教えてもらった。それにより、「材料

し共有できるようにした。

○個々の感じ方や考えが明確になるように、「どんな感じ?」「どうしてでうまくできたのかな?」「ヌルヌルだとできやすいってこと?」などと、触り心地を尋ねたり、うまくできた理由を聞いたり、幼児が言ったことを、周りの幼児にも聞こえるように復唱してつないだりした。

○手を使ってシャボン玉作りをしたことで、シャボン玉液の「ヌルヌル」、「トロトロ」、「ベタベタ」など素材の粘性に着目し、理由を考えるようになった。同じ性質でも、でき栄えが違うことに気付いた幼児の意見を取り上げ、探究のきっかけとした。

○大型TVに活動の様子を映し、楽しかったことややってみた結果などを幼児たちが発表し分かち合う場を設けた。

○複数の幼児が、家庭から材料を持参する様子から、保護者も共にシャボン玉作りの挑戦を楽しんでいることが伺えた。そこで、活動内容をホームページで公開し、保護者と遊びの展開を共有できるようにした。

○D児は、誰にでも優しく公平に接し、好奇心旺盛であるが、積極的な発言は少なく、優しさ故に失敗したり相手に強く言われたりすると泣いて思いを十分に表現しにくい姿があった。D児が見立てた、シャンプーとはちみつ、ブルーベリージャムの混合作戦に対し、自分の考えを積極的に言葉で表現したことを、逃さないように価値付け実現できるように後押しした。

●興味や関心が「割れない」だけではなく、「大きなシャボン玉」に広がっていることを受けて、新しい刺激となるように、シャボン玉の動画を見せた。動画のようにやりたいという願いに対して、ハンガーに毛糸を巻き付け、シャボン玉を作るための大きな輪を作ることを提案し準備した。

○多くの幼児が満足している中、一部の幼児は、「動画みたいな長いのができない。」「動画はもっと、大きかった。」など、楽しみながらも「もっと…」という思いを持っていることに気付いた。一人一人の幼児の経験値や好奇心、探究心のもち方に違いがあることを考慮しつつ、「もっと」と求めている願いからくる目的達成のために、再度、学級で相談する機会をもった。

●オンラインで交流する機会を設定し、科学

<p>こと」、「水の量が足りていなかったこと」などのうまくいかない原因を突き止めた。</p> <p>でき上がったシャボン玉液は、これまでに見たこともない長くて大きくて割れないシャボン玉を作り出すことができた。ハンガーの輪に加えて、棒にロープを結んで3人でタイミングを合わせて作る道具を用意したことで、仲間と力を合わせて直径1m以上の大きなシャボン玉を作り出すことにも成功した。</p>	<p>館という専門家から情報を得ることで試行錯誤してきた中で見つけた液を超えるシャボン玉液が完成したため、個別で使っていた輪に加えて、仲間と共に成し遂げる喜びを感じられるように3人でタイミングを合わせて飛ばす必要のある持ち手の棒付きロープを準備した。</p> <p>○専門家である科学館からの情報を得て、最高のシャボン玉液ができ上がったとき、幼児たちの喜びは絶頂期を迎えた。そこで、幼稚園中の幼児や教師にも声をかけ、皆にシャボン玉のでき映えを見てもらうことを提案し、幼児の願いの実現のときをさらに盛り上げようと考えた。</p>
--	---



図7 最高のシャボン玉

(2) プロジェクト2 年長児「光と遊ぼう」【2021年10月～12月、2月】

プロジェクト2におけるエピソードの概要と教師が特に工夫した環境構成と教師の援助

①エピソードの概要と具体的な幼児の姿	②主体的・探究的な学びが生まれる活動時の環境構成(●)と教師の援助(○)の工夫
<p>岐阜市科学館から、紹介されたクラフト花火のキットを活用し、各々が作った作品を窓際に飾っておくと、太陽に照らされてカラフルな影となった。それをきっかけに、光の美しさに心をときめかせ、仲間と共に光の探究を重ねていった実践</p>	<p>●幼児が、知識や経験、自分で調べた情報を基に、必要なものを自分たちで探し出せる素材や資材、道具を配置・準備した。</p> <p>○仲間と共通の目的に向かってやり遂げるための時間を保障し、対話的に関わった。</p>
<p>10月、F児たちが、「もっと、カラフルな光を作りたい」と願うようになり、黒画用紙を切り抜きラミネートしてマジックで色塗りをした。保育室いっばいに何色もの光の影が映りこみ、幻想的な風景が広がった。周りの幼児も光への関心が高まり、ビニール袋にマジックで描いて塗ったり、セロファンやカラービニールを貼り合わせたりし、個々の作品を見せ合う中で「合体したい」という願いが生まれ、大きな1枚のシートを完成させた。光のシートの中に入ると、幼児たちの体操服の白い部分にカラフルな光の影が映り、鮮やかに彩った。さらに、幼児たちは、「透明のものなら、きれいにカラフルな光の影ができる」ということに気付き、卵パックやプリンカップ等など、透明の資材を探してマジックでカラフルに塗りつぶした。</p> <p>光の遊びを繰り返す中で、幼児たちは、「虹色の光のプラネタリウムを作りたい」という願いをもつ</p>	<p>●クラフト花火のキットを活用し、各々が作った作品を窓際に飾っておくことで、幼児の心がときめくきっかけとなるようにした。</p> <p>●幼児の興味や関心に合わせて、「光と遊ぼう」などの本やタブレットを置き、願いに見合う素材を自分たちで探し出せるよう、黒画用紙やセロファン、カラービニール袋、マジックなどを準備しておいた。</p> <p>○光が色鮮やかに映るような材料を自分なりに見付け出す過程に寄り添い、共に心を動かしながら、願いに</p>



図9 光に魅了される



図8 カラフルな光の影



図10 素材を組み合わせる

ようになった。B児たちは、光のシートを段ボールで囲った暗闇の中に持ち込み、懐中電灯の光を当ててみたが、懐中電灯一つでは、明るさが足りずに、全体的に暗くてきれいな光にならないことに気付いた。そこで、幼児たちは、

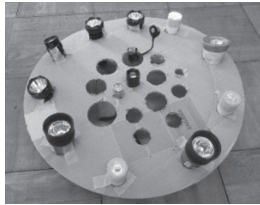


図11 懐中電灯の装置

次々と家庭から電灯を持って来て、段ボールを円状に切り穴をあけ、13個の電灯が固定できるような装置を作り上げた。

早速、段ボールの囲い

の中で試してみたが、今度は光が強すぎて、全体的に白くなり、色が出にくくなってしまった。そこで、少しずつ電灯を増減しては試し、一番カラフルに光が映るのは5本であることを突き止めた。また、真ん中に電灯を集めるのではなく、程よくバラバラに設置する方が、より広い部分にカラフルな光を映し出すことができることを見付け出した。



図12 懐中電灯で試す

11月、珍しいダブルレインボーを見て、幼児たちは心をときめかせていた。そんな中、G児が「虹って作れるよ。」と言い出し、早速「虹プロジェクト」が始まった。G児の言った通り、シャワーから勢いよく水を出してみると、簡単に虹が見えた。幼児たちは、ホースの口から水を出しても虹ができないのに、シャワーの口からはできることに気付き、小さい水の粒の方が、虹がきれいにできるのではないかと考えた。

そのため、霧吹きを使って、虹を作ることに挑戦したが、あまり虹はできなかった。

「(水の膜を作るために)大勢でやった方が



図13 虹を作る

よいのでは…」、「太陽に向かって反対側で水を出さなければできないのでは…」など、調べたことを基に考えるようになり、人数を増やして再挑戦すると、D児が黒色のズボンの面に虹が見えることに気付いた。そこで、黒い布を持ってきて黒幕を作り、霧吹きで連続して水を出した。すると、黒い布の前では、虹が繋がって見えた。

さらに、幼児たちは、様々な虹の作り方を調べ、太陽光だけでなく、人工光であるLEDライトをCDに当てて、天井に反射させて虹を作り始めた。美

叶うものを見付け出せるようにした。

●太陽の日差しが入りやすい秋の季節を利用し、幼児の作品をその都度窓際に掲示することで、日常的にカラフルな光の影を感じられるようにした。

○懐中電灯の数や設置する位置について、幼児が試しながら納得できる答えを見付けられるように、待ったり、見守ったり、仲間と意見を伝え合う機会をもったりした。

○口調が強い反面、間違ふことや失敗することを恐れて、積極的に考えを言葉にする姿は少ないF児が、自ら光の遊びを継続してやりたいと思う気持ちを叶えることで、自信をもって考えを言葉にしたり、友達の考えに共感したりできるのではないかと願い、F児の思いに寄り添い、価値付けたり、仲間の考えとつないだりした。

●7月の夏祭り(年長児が宇宙空間を再現したコーナーを創り上げた)に使用した段ボールの囲いで作成した宇宙プラネタリウムを活用できるように残しておき、幼児たちが、再度活用したくなる機会を伺った。

○一部の幼児で始まった光の遊びを、皆で共有できるとよいと考え、大型TVにその都度、活動の映像を見せ、伝え合い、分かち合う機会をもった。

○ハロやダブルレインボーなど、自然が織りなす神秘的な現象に立ち会う機会を逃さないよう、その都度幼児に知らせ、教師も共に豊かな感性を磨くようにした。

●虹作りでは、シャワーよりも小さな水滴が作れるものとして、幼児の身近にある消毒用の複数の霧吹きを準備しておいた。

○これまで幼児たちは、直感的、または遊びに至るまでの知識や経験の中から見立て、理由を考える姿が育ってきた。さらに、光の遊びでは、やってみて分かったことを活かして、「～だから…になった。それなら～にすれば、…になるはず。」というような仮定を考える思考に、変化していることに気付いた。そこで、結果を共有し、「どうすれば、うまくいくのか。」を問いかけ、実験結果から分かることを考える機会をもつようにした。

○LEDライトを使用して光を楽しむようになった幼児の姿を受け、教師は遊戯室に場所を移し、遊びを繰り返せる場を保障し、天井やスクリーンに向かって光を照射

しい虹のでき栄えに心が動き、鏡、メッキテープ、傷を付けた水入りペットボトルなどを使い、LEDライトに当てて虹を作った。

さらに、LEDライトに紫やオレンジ、赤、緑、黄色、青などのカラーセロファンを貼り、ライトの色を重ねて遊ぶ姿が見られるようになった。

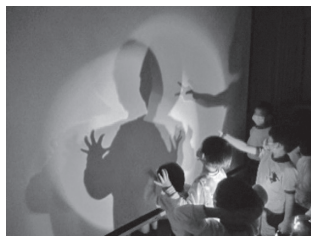


図15 新しい色の発見

その中で、それらの光が偶発に重なったとき、「ピンク(マゼンダ)」や「水色(シアン)」そして、「黄色(イエロー)」の新しい色を発見した。幼児たちはその色の美しさに心を動かした。光の前に立つと、自分の影が3色に分かれた。その影絵の美しさと不思議さに魅了され、幼児たちは色とりどりに見えるスクリーンに釘付けになった。

幼児の中から、自分たちが発見したことを発表したいという願いが生まれたことで、年少・年中児との異年齢交流や岐阜市科学館の職員にオンラインで発表することにした。その翌週、幼児たちが発表したことを基に、岐阜市科学館の職員によるサイエンスショー(出前講座)を実施した。

2月、生活楽しみ会(保護者に向けて表現遊びを披露する会)で、その内容を話し合ったとき、幼児たちは口をそろえて「虹色の光のショーをやりたい」と語った。題材は、「に

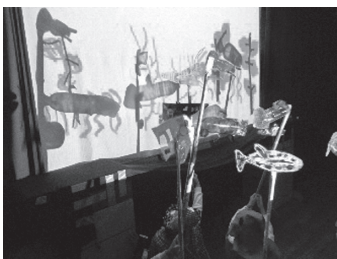


図18 シルエット劇の様子

じいろのさかな」と「スイミー」を掛け合わせたシルエット劇を取り入れたものに決まり、光遊びの経験を生かして海の生き物をカラフルに見せることを工夫した。幼児たちは、「どうすれば喜んでもらえるのか」、「そのために、何をを使ってどのように行うのか」などを考え、何度も話し合った。会の冒頭で、これまでの遊びの中で見付



図14 CDを反射させた虹

けたことをクイズ形式で発表し、シルエット劇と実



図17 実写劇の様子

できるような提案し、他の幼児も遊びの楽しさを感じられるようにした。

●これまで、一人一人の幼児の興味や関心に寄り添い、教材研究を重ね「もっと面白いことはないか」、「もっと他のやり方はないか」など、試行錯誤して、幼児と遊びを創り上げてきた。そこで、人工光に興味をもった幼児たちに、さらに光の不思議の面白さを味わってほしいと願い、光の3原色を利用して、美しい光の世界が見られるように、幼児が作ったものに加えて、同型のLEDライトを3本準備し、そこに赤、青、緑のカラーセロファンを貼っておいた。

○幼児は、試行錯誤の中で出した答えを「教えたい」、「喜んでほしい」、「美しさを知ってほしい」という思いが強くなり、幼児自身が発見したことに価値を見出しているようだった。そこで、幼稚園中の教師、年少・年中児が、年

長児が創り出す遊びの面白さを共有できるように、呼びかけ披露して、分かち合う機会をもった。

○岐阜市科学館の職員に依頼して、オンライン交流で幼児の発表を見てもらい、翌週には出前講座で、「光のサイエンスショー」を見せてもらう計画を立てた。

○これまで楽しんできた光の遊びを、生活楽しみ会のシルエット劇に活かしたいという幼児の願いを受けて、幼児と共に図書室で見合う題材を探したり、持ち寄って学級の仲間と相談したりした。

○劇に必要なものを準備したり、作ったり、演じたりする中で、どうすると、見ている人に伝わりやすいかをタブレットに撮影して振り返り、話し合う機会をもった。

●劇に必要な布や段ボール、セロファン、カラービニール、角材や丸棒、養生テープ、木工ボンドなどの素材や資材、材料や段ボールカッターやのこぎり、LED電灯などの道具を、幼児と一緒に探したり、準備したり提案したりした。

○タブレットなどで動画やクイズ、エンドロールなどを作成し、当日の発表に取り入



図16 繰り返される話合い

写劇を混合した表現活動を見事にやり遂げた。

れ、観覧者である保護者と情報を共有しやすくした。

#### IV. 遊び込む教育実践による、教師の資質向上と保護者の変容

##### 1. 教師の資質向上

シャボン玉作りを通して、幼児の豊かな感性による面白さと意外さに心を動かされ、予想をはるかに超える素材や結果に出会えたことにより、教師自身の好奇心や探究心が高まっていった。幼児の学びの連続・発展を目の当たりにすることで、教師も教材研究を重ね、教師の意図性をタイミングよく提示、提案しながら幼児と共に創り出す遊びの援助が向上した。それにより、これまで幼児の知識やできることの限界を決めていたことに気づき、幼児の興味や関心に応じて、幼児と対話しながら深い学びを展開できるようになった。

光の不思議についても、他教師と共に、虹やハロ、ダブルレインボーができる仕組み、また、光の3原色や色の3原色の仕組みについても調べるなど、教師自身が探究することの面白さに気づき、教材研究を深める姿勢が高まった。幼児の興味や関心に寄り添ううちに、不思議に思うことや心を動かされる内発的な動機付けがあることにより、幼児も教師も「知りたい」と思う気持ちが高まっていくことに気づき、教師は、既成概念にとらわれず興味・関心を広げる姿勢が大切であることが分かった。また年長児の担任だけでなく、他教師も育ちゆく幼児の姿や遊びの面白さ、教材についてなど日常的に職員間で話し合う姿勢が高まり、刺激を受けて各学年に応じた教材研究を推進したり、幼児の興味や関心を広げ、探究を深める実践に取り組んだりするなど職員間の同僚性が高まった。

##### 2. 保護者の変容

幼児が、家庭で幼稚園での遊びについて嬉しそうに話す姿から保護者も感化され、幼児の体験談に興味をもって聞く姿勢が高まった。話を聞くだけでなく、それに応じて遊びに必要なものを一緒に探したり、購入したりして幼稚園に持参するなど協力的な姿が生まれるとともに、ホームページへの掲載を楽しみにする保護者が増え、日常的に担任や職員と幼児の遊びについて話したり、家庭での姿を知らせたりなど共有しようとする姿勢が高まった。保護者も、幼児が自分なりに答えを見付ける経験の大切さに気づき、例えば、冬休みにスキー場に行った際に、雪の中に入れた水風船と外に出しておいた水風船の凍り方の違いを実践するなど、子育てに工夫が見られるようになった。

#### V. まとめと課題

ゆるやかな時間と空間において、思いのままに遊んで、遊んで、とことん遊び込む遊びを実践する中で、教師が、幼児の自発的な思いや願いに気づき、「やってみたい」、「なぜだろう」という気持ちを満たす環境を整えたり、共に感動し価値付けたりすることにより、幼児の豊かな感性、言葉による表現力、そして思考力（理由を考え、予想を立て、解決方法を考え、角度を変えて考えるなど）が一体的に高まった。また、自分なりの思いや願いを叶えるために、試行錯誤する中で仲間の思いや考えに耳を傾け、受け入れたり認め合ったりする姿が増えた。それにより、答えは一つではないことに気づき、正解を出すことにこだわらず、問いや願いが生まれると、関わり合いながらすぐに考えたり、調べたりするなど探究する姿勢が高まった。これらはまさに、これからの教育において求められている「試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして探究し続けていく力」の源泉と言える。主体的に活動する経験を通して、「やってみたい」という願いに向かって、仲間と考えをつなぎ合わせる過程の中でこそ、遊びを創り出す面白さに気づき、好奇心を高め、探究し続ける姿勢が深まっていくのだと実感した。

今後は、幼児期の遊びの中で芽生えた「仲間と共に探究し続ける力」を、小学校の生活科や総合的な学習の時間における探究的・協働的な学びにどう繋ぎ、どう開花させていくのかについて一層考えを深め、一人一人の子供のたゆまぬ成長を軸として指導の連続・発展を丁寧に紡いでいきたい。

#### 注・文献

- 1) 文部科学省 (2017) : 「幼稚園教育要領 (平成 29 年告示)」, フレーベル館, 3.
- 2) 文部科学省 (2018) : 「幼稚園教育要領解説 (平成 30 年 3 月)」, フレーベル館, 65.